

■ 書 評



精神疾患と認知機能

編 精神疾患と認知機能研究会

編集統括 山内俊雄

新興医学出版社

2009年11月

340頁, 定価 10,500円

最近、認知機能や認知障害などのように、「認知」という術語が精神医学分野でよく使われるようになった。しかし、この認知という言葉は、一般の精神科医にとってはあまりに漠然とした概念である。例えば、統合失調症や認知症でいわれる認知は、認知行動療法の認知とは違った意味合いのように思える。神経科学でいわれている認知はさらに難解である。これに高次機能障害などという概念が入ってくると、完全にお手上げである。とはいえ、統合失調症の中心的な障害は認知機能障害であるといわれると、知らないままではいられない。

ここで紹介する「精神疾患と認知機能」と題されたモノグラフは、評者のように認知機能についてまとまった知識を得ようとしている精神科医にとっては、待望の書ではないだろうか。全体は大きく4つの章に分かれている。さらにその下にある全45節をそれぞれの専門家が執筆している。B5判で本文は300ページに及ぶ大著であるが、このモノグラフは分担執筆にありがちなばらばらな印象がない。おそらく、章の最初の部分が必ず導入的な総説となっており、そこから読んでいけば、その後の理解が容易になっていくような仕組みとなっているためであろう。

第1章は「認知機能について」と題して、編集統括をとられた山内俊雄先生が執筆されている。この

章は精神医学分野での認知機能の概念を概観する上で、きわめてわかりやすい読み物となっている。第2章は「認知機能の基礎」であり、まず脳と認知機能について神経科学的な解説がある。その後に認知機能の各要素、すなわち情動、記憶、注意、知覚、言語、覚醒水準、遂行機能、社会認知がとりあげられ、それぞれの要素の認知機能における役割が説明されている。執筆者ごとに微妙に認知機能の概念が異なっているのが興味深い。第3章は「認知機能をどう捉え、評価するのか」とされ、認知機能検査で用いられる神経生理学的、あるいは神経心理学的な手法や、テストバッテリーなどが説明されている。この部分は、執筆者が実際に実験に携わっているためか、詳細である反面、難解でもある。しかし、認知機能検査の背後にある理論を理解しようとしたときには、最初に読むべき内容であろう。

本書の中心となる「精神・神経疾患と認知機能」は第4章で取り上げられている。統合失調症の認知機能は当然として、気分障害、認知症、強迫性障害などの精神疾患や、てんかんを含む神経疾患における認知機能障害が説明されている。臨床家にとってはもっとも読みがいのある部分である。最後の第5章は「認知症機能とその改善」とされ、薬物療法や認知機能リハビリテーションなどが紹介されている。あえていえば、この部分はまだ手探りの状況のようにみられる。まだ探検されていない地図の空白部といっっては言い過ぎであろうか。今後の認知機能障害の研究は、おそらく障害された認知機能をどう改善していくかに向いていくのであろう。

本書は2001年から開かれている「精神疾患と認知機能研究会」の参加者が集まり発行が企画されたという。執筆者の意気込みが感じられる若々しいモノグラフとなっている。若手の研究者だけでなく、一般精神科医にとっても推薦できる良書である。

(仙波純一)